

武藏野日曜集会 復活節

復活の生命

——マルコ第16章1～18節——

小池辰雄

1976年4月18日

驚嘆驚倒して読む 御靈の世界に入る 御靈の世界に入る なんぞ我を棄てたまひし 彼らを赦せ お前たちは私に躓くよ 天道地路 四大元より主無し 觀念のキリスト教ではだめ 信じてバプテスマを受くる者は救わるべし 自由自在な不思議な世界 発しては靈言靈行となる

【マルコ16・1～18】

¹安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて香料を買い、²一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。³誰か我らの為に墓の入口より石を^{まろ}転ばすべきと語り合いしに、⁴目を挙ぐれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は^{はなは}甚だ大なりき。⁵墓に入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。⁶若者いう『おどろくな、汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ぬれど、既に甦りて、此處に在さず。視よ、納めし処は此處なり。』⁷然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼処にて謁ゆるを得ん、曾て汝らに言い給いしが如し』⁸女等いたく驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼^{おそ}れられたれば一言をも人に語らざりき。

⁹一週の首の日の払暁、イエス甦りて先ずマグダラのマリヤに現れたもう、前にイエスが七つの悪鬼を逐いだし給いし女なり。¹⁰マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。¹¹彼らイエスの活き給える事と、マリヤに見え給いし事とを聞けども信ぜざりき。

¹²此の後その中の二人、田舎に往く途を歩むほどに、イエス異りたる姿にて現れ給う。¹³此の二人ゆきて、他の弟子たちに之を告げたれど、なお信ぜざりき。

¹⁴其ののち十一弟子の食しある時に、イエス現れて、己が甦えりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固なるとを責め給う。¹⁵斯て彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣伝^{のべつた}えよ。¹⁶信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。¹⁷信する者には此等の徵、ともなわん。即ち我が



名によりて悪鬼を逐いいだし、新しき言を語り、¹⁸蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん。

●驚嘆驚倒して読む

¹安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹ぬらんとて香料を買い、²一週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。

ここに一番先に、「マグダラのマリヤ」という人名が出ている。マグダラという所はガリラヤ湖の西岸のまん中あたり、少し北の方で、ティベリアとカペルナウムのちょうど間くらいな所です。「マグダラ」というのはアラミ語では——アラミ語というのはキリストの直かに使つた言葉です——「ミグデラ」と言つて「塔」という意味です。その当時は寒村ではなくて、ガリラヤ湖畔の四つの町の一つと言われるくらいで、土器を造つたり、染色、魚の燻製などをして、地中海の方面にまで持つていく。そういう商業的な都市であつたということです。

「マグダラのマリヤ」という言い方を一字でいうと、「マグダレーナ」——ギリシア語では「マグダレネ」——と言う。「マリヤ」という言葉はもともとアラミ語では「マリアーム」と言つて、語尾に「M」がある。モーセの姉さんの名前に「ミリアーム」というのがあるでしょ。ヘブライ語では「ミリアーム」という。

「七つの悪鬼に憑かれた」

というのは、ある意味においては、悪鬼に狙われるような女性ですから、なかなか魅力のあつた女性であつたと思われます。画家が大体、そういつたような具合に描いている。しかし、これはキリストに本当に救われた。「七つ」というのは、本当の数の七ではなくて、「多い」という意味です。

「ヤコブの母とサロメ」の「サロメ」はあの悪いサロメではない。「一週の首の日」というのは、もちろん、ユダヤでは、安息日は金曜日の夕方から土曜日の夕方までで、それが終つた翌日なので、ちょうどどちらでいうと、日曜日の朝というわけです。大体、6時前後だと思われます。

³誰か我らの為に墓の入口より石をまる転ばすべきと語り合いしに、

「誰が石を転がしてくれるだろうか。とても私たちにはあんな大きな石は転がすわけにいかない」

と語り合っていた。女人の人ですからね。

⁴目を拳ぐれば、石の既に転ばしあるを見る。この石は甚はなはだ大なりき。

これは、マタイ伝によりますと、

「さて安息日おわりて一週の初の日のほの明き頃、マグダラのマリヤと他の



マリヤと墓を見んとて來りしに、²視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り來りて、かの石を転ばし退け、その上に坐したるなり。³その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。⁴守の者ども彼を懼れたれば、戦きて死人の如くなりぬ。」（マタイ28・1～4）

とある。私が『無者キリスト』に書きました靈震です。靈的な震動が地震を起こしたわけで、もとはこの靈震である。靈的な力がそれをした。キリストの復活の力と言つても差し支えないわけです。十字架上でキリストが叫べば、至聖所の幕が二つに切れてしまつて、旧約の宗教はこれで「アウフヘーベン」してしまつた。「破られかつまた満たされた」ということですから。この御靈の世界というものは、素晴らしいことが時々起きるわけです。

「守の者ども彼を懼れたれば、戦きて死人の如くなつた」

というのだから、もの凄いことが起きた。

⁵墓に入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。

天使のことです。次元の違つたものがそこに現れますから、驚く。私たちも、聖書は驚嘆驚倒して読まなければ本当は読めない。聖書を驚嘆驚倒しないで読めるのは、本当は読んでいないわけです。そういう聖書の現実は、ことに福音書は、我々の相対的な日常現実とは違う。キリストのしたり言つたりなさつていることはみんな高次元の、絶対次元からの現象ですから。まあ、それを

「どうだ、こうだ」

と頭でもつて解釈して研究したつて、それは始まらんですよ。

●御靈の世界に入る

⁶若者いう『おどろくな、

天使が言うのに、「驚くな」と。いつも私が申し上げているように、「驚くな」というのは、本当は「驚け」です。ところが、本当にこの世界に入ると、驚きが喜びになるから。そこで、

「ただ、驚いているな」

というわけです。この「驚くな」の奥は、

「この現実は、これが本当の世界なんだぞ。むしろ、喜べ」ということ。

汝らは十字架につけられ給いしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦りて、此処に在ざす。

「自分はこの苦難を受けて、三日目に甦る」

と、復活のことをちゃんと予言しておられる。キリストは十字架につくこともちゃんと知つてゐる。自分を裏切る者が弟子たちの中にはいることも分かつてゐる。



ユダの中に妬みの根性が入った。ユダというのは優れた弟子ですから。そういう悪魔の使いが来ていることも分かつていて。だから、キリストはユダに、

「お前の為すべきことをしろ」

と。ということは、

「私を裏切つて、ローマ兵に渡せ」

ということです。そういう十字架にかかることも分かつていて。それから、復活もちゃんともう知つておられる。ラザロを甦らせたキリストですから。もの凄い靈的生命を持つておられる。変貌の山でもつて変貌してしまつた。モーセとエリヤが現れて彼と語つたという。これはもう復活のキリストの予表ですからね、みんな。まあ大変な現実です。

そういうこの聖書の現実をいい加減な呑気な氣持で読めないわけですよ、私たちは。これは本当に冥想し祈り入らなければ、本当は聖書のそういう箇所は過ぎていくことができない。だから、

「降参しなければ入れません。どうにもなりません」ということ。

「そんなことがあるでしようか。聖書に書いてあるから、仕方がないから信じておきましょう」

なんて、そんな気持だつたら、ひとつもダメです。

「カトリックではどう解釈しているか、プロテスチアントではどうか」

なんてことをいくら研究したつてだめだ。

もう、キリスト直結でなければ。私みたいにバカになつて、聖書に書いてあることをそのまま受けとつて、その現実に入ると、私みたいな靈的でない男が本当の御靈の世界に入るからおかしい。自分で不思議でしようがない。

● なんぞ我を棄てたまいし

そういう復活もちゃんと予言しながら、キリストは、

「なぜ、私をお棄てなさるか」

とも言われた。だから私は、

「組織神学ではない。神の真理の世界はドラマである」と言う。

「なぜ、この私をお棄てなさるか」

と、十字架上でもつて彼は呼ばれた。これは神の義が立たんがためです。

「自分は神さまの義を立ててきた。貫いてきた」と。

「神よ、汝は然り」



「御意を成させたまえ」

と言うときには、自分に対して「否」と言つてゐる存在です。本願を肯定しているのが、
ということです。キリストは本願に生きていた。自分の小さな願いは捨ててしまつた。

「わが願いにあらず、汝の願いを成したまえ」

と、十字架の杯を受けられた。これは英雄中の英雄ですよ、キリストは。天の十二軍を呼べば、ローマの兵隊をやつつけることができたんだ。けれども、それをしなかつた。

「然り」

と神に言つたその生き方が義であつて、

「その義人は一人もいない。ただイエス・キリストだけである」

とパウロが言つたのがそのこと。パウロが始まれば自分を義人と思つていた。神に対しても常に熱心であつたから、キリストを信ずる者を迫害していた。神に対する熱心は、これはパリサイになる。だから、パウロはパリサイの筆頭でした。いわゆる信仰熱心、

「信仰のみの信仰」

なんてやつてゐる無教会は、

「自分たちの信仰こそ本ものだ」

と思つてゐる。信仰を私してゐる。とんでもない。信仰は何ものでもない。

「神さまが、キリストが一切である」

ということに本当に自分を投げかけてゐるのが、もし信というなら信だ。信なんて言わなくていい。私はだから、

「絶信の信、賜りたる信である」

とさう。これは親鸞の信仰がそれです。

「弥陀の御もよおしによつて」

という。私はあの『歎異抄』とルターの『クリスチヤンの自由』とは東西の双璧だと言いました。

そういう義を生きた。だから、この義を神さまに代わつて叫んだ、その逆説的な言葉が、
「なんぞ、我を棄てたまいし」

なんです。

●彼らを赦せ

それから、義の叫びと同時に今度は、愛の叫びです。

「彼らを赦してやつてください」

と。「絶対矛盾の自己同一」という、「義と愛」なんだ。单なる「痛み」ではない。愛です。「彼らを赦せ」と。十字架にかかっているから、この言葉が言える。十字架にかかっていなければ、「彼らを赦せ」とは言えない。キリストはこの贖罪の愛を、身をもつて表した。だから、



キリストは黙つていらつしやつてもよかつた。けれども、分からなかから、
と言われた。我々罪びとを完全に担つてゐる二千年前の言葉はフレッシュに今、現に我々
に響いている。

「赦してやつてください」

十字架が、何といつても土台なんです。そういう、義と愛は——よく神学者が使う、いわゆる「緊張関係」なんものではない。そういう表現もできるでしようけれども——完全にこれは分けることのできない義にして愛である。

このキリストですから、地上の肉体よりももつと凄い靈体をもつて顕れたのがこの甦りの姿です。ルカ伝に書いてある。復活のキリストが顕れて、

「何か食べるものがあるか」

と。お魚があつたので、それを焼いて、キリストは食べた。これは本當ですよ。私はいわゆる靈的な人間ではないけれども、これは本當だということを端的に受ける。ところが、一流の神学者たちのグループに私はいたけれども、これを笑つたから、

「では、あなた方と私は袂たもとを別つ」

と言つて、私はそのグループから出てしまつた。こと聖書の真理になつたら、一步も譲らんですよ、私は。

この甦りのキリストの変幻自在は、幽靈ではない。トマスが幽靈かと思つたから、
「では、私の釘の痕を見ろ」

と。エマオ途上の二人の旅人と歩いた「第二の旅人」と私は書きましたね。あれはちゃんと足があるんですよ。幽靈みたいに書いてある絵もあるけれども、そうじやない。これはもう靈体の世界ですから。だから、まずもう限りなくキリストの中に入つていかなかつたら。地上では私たちはどうせ三日月ですわ。三日月だけれども、これは本當の三日月だから、必ず満月になる。上弦の月ですよ、下弦の月ではダメです。満ちゆくところの月です。不完全における未完成の完成ということ。未成交響曲というのがあるが、あれは余韻を持つてゐるね。

ドイツは、あのゲーテが出たころは絢爛たる人物が現れた。カント、ヘーゲル、フイヒテ、シリング、シュライエルマッハー。ゲーテ、シラー、ベートーベン、シューベルト。ところが、その時のドイツはどうですか。まだ国家的統一はない。フランス革命があつて大騒ぎ。ナポレンがドイツを蹂躪して慘憺たるドイツです。しかし、そのときにドイツの精神文化は本当の花を咲かせていた。ドイツ魂です、これ。

日本人は何ですか。問題はただ表面的な経済と政治の問題ばかり。魂の世界はどうしてしまつたか。学者も権威を持たない。伝道者も本当の聖靈の器が少ない。もう、あなた方は誰であろうとも——人間的な尺度ではないですよ——本当に御靈の人になつてください。そうしたらば、自在に本当に人を動かしていく。もう自信ならざる自信が来ますから。



●お前たちは私に躡くよ

視よ、納めし処は此処なり。⁷然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ

ところが、弟子たちは、

「そんなことがあるか」

「お前たちは私に躡くよ」

なんて言つている。キリストにさんざん予言されていながら。直弟子たちといわれながら、とキリストは言われた。その通り、彼らは躡いてしまつた。我々自信が彼らと同じ躡きなんだ。聖靈が来るまでは、本当に受けとることができない。受けとつたような顔しているけれども。

「汝らに先だちてガリラヤに往き給う、彼處にて謁ゆるを得ん、曾て汝らに言
い給いしが如し」⁸女等いたく驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼れた
れば一言をも人に語らざりき。

これはよつぱどシヨツクを受けたね。ガタガタしちやつた。

⁹一週の首の日の^{はじめ}拝暁^{あかつき}、イエス甦りて先ずマグダラのマリヤに現れたもう、

前にイエスが七つの悪鬼を逐いだし給いし女なり。

私は今日、よほど「マグダラのマリヤ」という題にしようかと思つたくらいです。そういう題で話したことはまだないですけれども。

これはマグダラからずつと、キリストがエルサレムに来るとき、女人たちはたくさんいましたが、その群衆の中に彼女はもちろん混じつていた。そして、キリストに救われたことを本当に身をもつて彼女は感謝した。いろんな意味において彼女はキリストに仕えていたわけです。弟子たちは躡いても、かえつてこの一女性が信実を貫いているんです。信実の信は「トロイエ」です。信じぬいているわけです。ロダンがこのマグダラのマリヤが十字架のキリストにしがみついている大胆な彫刻を造つてますけれども。一番先にこのマグダラのマリヤに顕れたということは、いかにキリストがこの女性の信、百分の信を受けたおられたかと。その気持がそこに分かるわけです。

まあ、復活のキリストの、昔からの研究の本に、

「七つの悪鬼に憑かれたようなやつだから、この女性は何か少し精神状態がおかしくなつて、幻を見たのだろう」

なんてなことがよく書いてあつた。そんなことではない。

¹⁰マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。

キリストは十字架にかけられて、極悪人の一人として悲惨な最期を遂げてどうにもならんと言つて、絶望の悲しみの中にみんないたわけだ。弟子たちも散つてしまつた。

「しょうがないな。これはメシヤかと思つたけど、そうじやなかつた」
なんて。



¹¹彼らイエスの生き給える事と、マリヤに見え給いし事を聞けども信ぜざりき。

「彼らは信じなかつた」と書いてあるでしょ。

¹²此の後その中の一人、田舎に往く途を歩むほどに、イエス異りたる姿にて現れ給う。¹³此の一人ゆきて、他の弟子たちに之を告げたれど、なお信ぜざりき。

これも信じない。受けとらない。

「そんなことがあるか。変だな。お前たちは幻を見たのではないか。少し精神状態がおかしいんじゃないか」と。

●天道地路

だから、「キリスト教」なんて言うから間違えてしまうんですよ。「教え」だなんて言つてゐるから。「キリスト道」です。道の字も要らないくらいだ。もう、「キリスト」だけ。

「我は道なり」

ですから、キリストという道なんです。キリストという天道なんです。天道地路。私たちは地上にあつて各々の足でもつて歩く。一人ひとりの歩く路はみんなちがう。ちがわなかつたらうそです。自分が神さまに歩まされた路みちというものは、これはみなそれぞれのつべきならない路を歩かされている。それが天道に即する。キリストに即する。キリストに即するときに本当に地路が歩ける。天道に即する魂にならなければ、地路が歩けないんです、自分の路を本当に。

これを「実存」と言う。キリストという生きた道を自分の中に体しますと、歩く歩き方がのつぴきならない靈法に従つてゐるわけです。人を羨うらやむことも何もいらん。躊躇たり転んだりするよ、人間だから。でも、常に新たに進んで行けます。妬みも争いも要らん。

ゲーテは、

「イズムを超えないければだめだ。何々主義なんて言つてゐるうちはダメだ」と言つてゐる。イズムにはそれぞれの眞理性はありますよ。しかし、それは限界を持つてゐる。それを超えなければ、本当にイズムをまた支配することがでないんです、超えた世界に入つていなければ。それぞれのイズムの善さを自由自在に使えるのはイズムを超えた人です。ただイズムを否定してはいるのではない。

浪漫主義、理想主義、現実主義。いろいろいいでしよう。政治の中にもいろいろな主義がある。それぞれ眞理性を持つてゐます。けれども、それを超えなければ、それを本当に正しく認識することも使うこともできない。単なる否定ではない。

ところが、自分を、そのイズムを絶対視して、何のかんのやるから、争いになつて、結局すべてが硬化現象。もうはつきりしてゐるんだ、これは。どうして、こういうはつきり



した、ある意味において、「 $2+2=4$ 」みたいな真理がつかめないかということですよね。ところが、そうなんだ、現実は。

ということは、要するに福音の無限無量の世界を持つていられないからなんです。学問を超絶しなければ本当の学問はできない。そういう意味にける自由自在さというのは、勝手気儘とは違う。もう説明できなければ、これは自分で体していかなければだめなんだ。だからとにかく集会には来なくては。どうしても来れない事情もありましょう。それは仕方がない。この集会というものは——体裁でやっているなら、私は決してこんなことは言いません——語るも聞くも同じこと、ただ本当にこの根源現実の中に入つて、いよいよキリストを生きようというだけの話なんだ。そうすれば、相対的な問題を支配することができる、解決することができます。解決しなくとも、それにちゃんと処していくことができる。私にも向きがあります。

「あの人はなぜ来ないんだろうか」

と思うことがありますよね。もつとそういう意味においては神経が太くならなくては。太くならなくてもいいよ、無になれば。無を賜っているんだから。どうして、キリストを本当に慕わないんですか。キリストは一切の責任を負つてくださるし、力もくださる。

こないだ言いましたね。棟方志功は、

「自分の描いているものに責任を負わない」

と。というのは、彼は動かされて描いているから。そのようなことで、まず、どんなことにも本当に耐えていくことができるし、また、本当に喜びである。

●四大元より主無し

まあ、復活の生命の世界に入れると、死んでも死はない。

「いつ仆たおれても、私は次の隣の部屋へ行くようなものですよ」

というような境地になるわけです。

今から約千六百年前の中国に、僧肇(そうじょう)
(374～414) という学僧がいた。これは仏門に帰依して
大いに勉強していた。彼は羅什三蔵(らじゅうさんぞう) の第一の弟子であつた。ところが、どういう事件だか
知りませんけれども、王さまの怒りに触れて、死刑の宣告を受けた。そこで、僧肇は、

「私は死にます。しかしながら、七日間だけ猶予をいただきたい」

と。そこで、彼は獄につながれて、その一週間のうちに『法藏論』を書いた。自分の使命を果たしたいからだね。あとは命はどうでもいいと言うんだ。そして、從容として刑場の露と消えた。ときに41歳といいます。大変な人だな。それで、処罰される臨終に次のように
な遺偈（いぎ）を残した。遺言の言葉です。

「四大元より主無し、
五陰本来空なり、



「首こうべを將なまこつて白刃はくじんに臨ひらめば、
猶ごおん春風こうふうを斬なぎるが如いし」

四大は——地・水・火・風です——元より主無しと。「元主無し」とは、どこから造られて、どれに支配されているということがないということです。

「五陰ごおん本来空くうなり」

と。「五陰」というのはこの相対界のことです。この相対界は本来、空である。死んだ生きた、なんのかんのと、人間のそういった相対界は空である。

「首こうべを將なまこつて白刃はくじんに臨ひらめば」

即ち、首を斬られるその白刃に自分の首を差し出せば、

「なお春風こうふうを斬なぎるが如いし」

と。春風を斬るようなものだと。即ち、

「自分の首は飛ぶかもしれない。けれども、その白刃は私の首を斬つても、ちょうど春風を斬るようなもので痛くも痒くもない。涼しいくらいなものだ。私の首はもうどつちでもいい。体に付いていようが付いていまいが、そんなことは問題ではない」

と。まあ素晴らしい句です。やはり、仏道や何かに本当に打ち込んだ人たちの魂はそういう境地にまで入るね。かいせん快川和尚の、

「火もなお涼し」

なんて言っているのと同じだ。私たちもキリストの生命を本当に——「復活の生命」と題しましたが——

「このキリストの生命を本当にいのちしているならば、春風を斬るが如し。涼しい気持で向う側に、隣の部屋へ入つていく。天界の天のお茶でも飲みに行こう」
てなわけだ。これは平常の、私たちの信がそのような根源の現実を、相対界にありながら絶対界を歩いているような魂でなければ、「信仰」なんて言つたつてしようがない。「信仰のみの信仰」なんて、信仰を何ものかと思つてね。

皆さん、本当にうれしくないですか、この世界は。たまらんじやないですか。

●観念のキリスト教ではだめ

ゲーテの『ファウスト』の中の言葉に、

「自分はいろいろなものを研究した。法学も医学も哲学も神学もやつた。けれども、前と同じように元の木阿弥のなんと惨めな馬鹿者ではないか」

と。こんなものを研究したけれども、なにもだめだ、どうにもならんと。

「何も知ることができない」ということが分かつた」

と。ソクラテスの自覚です。ゲーテも始めの方で書いている。ギリシア人はそういった知



の世界で行き詰まる。ユダヤ人は行為の世界で行き詰まる。だから、パウロが、

「ああ我悩める人なるかな。この死の体からだより我を救わんものは誰ぞや」

と。行為の世界、道徳の世界、また学問の世界で、みな人間は行き詰まり。どうしたらいいですか。道徳を完成するもの、超道徳の世界、超学問の世界、これは福音だけが与えてくれる。

ゲーテが『ファウスト』の中で、もういよいよこれは絶望だと。口に毒杯を受けた瞬間に、

復活節の子どもたちの甦りの歌を聞いて、飲むことをやめた。ゲーテという人は小さい時からもちろん教会にも行きましたし、聖書はよく読んだ。終生、聖書を愛読した。彼らしく読んだ。そこに天使のコーラスがある。

「キリストは甦りたまえり。

それは朽ち果てるところの存在、そういった胎の中から甦つた」と。この地上の朽ちゆくところの土壤からキリストは甦りたまえりと。

「いろいろなこの世きずなの絆からお前たちを解き放ち、

いろいろな行為をもつて神さまをほめたたえる人たちに、

愛を証する人たちに、

はうからのようにして困っている人たちに食物を与える人たちに、

伝道して歩き回っている人たちに、

喜びを約束する、そいつた人たち、

あなた方にこそ、本当の先生即ち、キリストは近いのだ。

彼はそこにいたもう

と。キリストが本当に近よってくださるのは、そのようにして事実、証をしていく連中に對してだということを、このゲーテが言っているわけです。観念のキリスト教ではだめだぞというわけです。

●信じてバプテスマを受くる者は救わるべし

それで、この十一弟子が食べていた時に、

¹⁴ 其ののち十一弟子の食しおる時に、イエス現れて、己が甦えりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固なるとを責め給う。

復活のキリストが怒つてしまつた。なんだと。そして、

¹⁵ 斯て彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音のべつたを宣伝

えよ。¹⁶ 信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、

キリストはバプテスマを施した。そのバプテスマはもちろん聖靈のバプテスマです。ところが、普通のキリスト教会では、それを水のバプテスマにしているでしょ。これは聖靈



のバプテスマです。

「キリストを受けとつて、聖靈のバプテスマを受けるものは救わるべし」

ということです。私たちは、聖靈のバプテスマはなにも特別に洗礼式なんてことをやらない。集会を通して御靈のバプテスマを皆さん受けている。私たちは十字架のキリストを本当に受けたら、御靈のバプテスマを受ける。パウロが、

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず」

と。私も相変わらず生きてますよ。相対的な私は生きてますよ。だけれども、絶対的に私はキリストと共に十字架につけられているから、そこにやつてくるのは聖靈の世界です。

「キリストわがうちにありて生き給うなり」

とパウロは言っているじゃないですか。

「我もはや生くるにあらず。されど、キリストわがうちにありて生き給うなり」

と。全くこれはドラマです。自分は死んでいる。けれども、本当は生きている。死んでこそ生きる。そのような事態である。

●自由自在な不思議な世界

皆さん、どしどし本当の世界に進んでください。何といつても、使徒の中ではパウロが一番健全につかまえていますから。いいですよ、ヨハネが好きならヨハネでも。ヨハネの中にももちろん十字架がある。パウロほど十字架のことは言つてませんけれども。私は人間的にはむしろヨハネ的な人間かもしれない。ヨハネを読めばヨハネとなり、パウロを読めばパウロとなり、ヤコブを読めばヤコブとなり、ペテロを読めばペテロとなる。自由自在だ。これが本当に不思議だね。妙な好き嫌いでなくなってしまう。

それはキリストの世界に本当に入るから。無色透明の世界に入ると、無限色を持つているから。だから、カーネーションを見ればカーネーションとなり、ユリを見ればユリとなる。雲を見れば雲となる。大自然の如くなる。嵐なんてのは好きだよ。もの凄い勢いで回転している。生命的だ。けれども、無風も好きだよ。そういうように、こだわらない魂になれるんです、この御靈の世界に入ると。御靈と言うと、聖靈とと言うと、

「これはとにかく聖なるものだから、大変だ。私は汚らわしくなってしまうからい

なんて。窒息してしまうよ、そんなことしたら。御靈は愛の世界で、光の世界で、熱い世界ですから。

そういうわけで、さきほどの、

「四大は元^{もと}主無し」

ということ。四大の地水火風は自在であるんです。地は、大地は大愛を表している。大地は一切のものを担っている。汚いものも何でも、固いものも何でも全部、大ビルディング



だつて何だつて全部、これを背負つてゐるぢやないですか、大地は。もの凄いです。地と
いうのはどん底の力の愛の世界です。あとは、水・火・風は全部、聖靈のことではないで
すか。聖靈は水の如く、風の如く、火の如く。だから、全体で愛の聖靈になつてしまふ。地・
水・火・風を冥想するだけでもう、福音の世界をつかんでしまうですよ。

「五陰ごおん本来空くうなり」

と。相対界なんてものは空だと。

「空即是色、色即是空」

といふことも言えるし。相対界において実は絶対なものが見えるし。はかなただ嘆いなんて言つ
てない。皆さん、何を読んでも、ちゃんとそれをオリエンティーレンできるんですよ。

「どうもこいつはかなわないな」

なんて、それはかなわないような言葉や概念は学問の世界ではあるでしょう。それさえち
よつと分かれば何ということはないんですよ。それから、御靈のバプテスマを受けますと、
そういうた罪に定められることがなくなつてしまつて、

然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。¹⁷信する者には此等の徵、ともなわん。

即ち我が名によりて悪鬼を逐いだし、

「聖名により出でよ」というわけだ。

新しき言を語り、

「新しき言」というのは異言です。また、異言ばかりでなくとも、何か示された新しい言葉
が出てくる。

¹⁸蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、
パウロがそれを実証しました。

病める者に手をつけなば癒えん。

私も幾度もそれをやらせられております。

●発しては靈言靈行となる

皆さん、勇ましく進んでくださいよ。キリストの福音の世界は本当に人を救つてやまな
いところの事態ですから。

「私にはまだまだです」

なんて、まだまだではない。今即刻、行くんです。もうキリストに全託して、自分を投げ
入れてごらんなさい。頭で考へていてるうちはだめ。とにかく、今は頭でつかちが多くてし
ょうがない。とにかく、全存在、全的ということが大事です。知・情・意なんて分けるの
ではない。女の方は直感的、全的な角度が、むしろ女性の方が多いね。男性はすぐ分裂する。
「こうだ、ああだ。何だかんだ」
と、理屈ばかりこねてね。だから、女性の方が信仰のすじはいい。マグダラのマリヤな



んていうのはまさにその典型と言つてもいいわけです。キリストに救われて、まつしぐらに信じぬき、キリストを愛しぬいていった。

「徵」というのは、私が「徵の宗教」といつて、一番先に書きましたね。ジンボール（徵）。

「ユダヤ人は徵を求める」

というけれども、あの「徵」ではないです。我々自身が即ちキリストの徵であり、キリストの印形である。キリストの御靈を宿している者はキリストの生ける徵です。パウロは、

「十字架の徵」

とも言いました。ガラテヤ書の終りの方で。

「私を煩わすな」

と。即ち、徵であることが証人であることです。キリストの徵であることが証人、証者。手足に表れては行為となり、口に表れては言葉となる。言葉と行為は同じことですから。

「^{やす}言うは易く行いは難し」

なんて、そういう分析的な判断をするから、いつまでたつてもだめなんです。奥の世界に入つてごらんなさい。キリストの生命が来ていれば、甦りのもの凄い生命が来ていれば、発しては靈言となり、発しては靈行となる。

それは事業をしようが、学問をしようが、人を癒すことをいたしましようが、皆さんがなさることは何でも、この言行は元から来て、表れては言となり、表れては行となるだけの話で、「^{やす}言うは易く行いは難し」なんて、そういう判断は根源の世界を知らないから、そういうことを言つてはいる。言うのは決して易くはないですよ、本当の言葉というのは。

キリストの生命をマグダラのマリヤはむしろ本当に受けとつてはいた。他の連中は、弟子たちは、かえつて躡いた。あの「レプタ一枚」のところでも私は書いたでしょ。

「あの財布を傾けてレプタ一枚を、お賽錢を投げたこの婦人は弟子たちよりも本当の弟子であった」

と。とにかく、本ものの世界を本当に見、かつまた体していかなかつたら、つまらんですよ、人生は。どんな現実にあっても、絶対にへこたれなくなるですよ、パウロと同じように。

「^せ為んかた尽くれども望みを失わず」

という。私のところでこの集会に連なつていて、どうしてそれに気がついてくれないかと、出て行つた人たちを私は情けなく思う、正直。この破れ器を通して何が発しているかという、そこを見ないから。私という破れ器を見てはいるからみんな躡く。だめだよ、そんなのは。福音は破れ器を通して表れるんです。整つたものには、福音は表れない。道徳が表れ、哲学が表れるでしょうが、福音は表れない。

